

「雄呂血」「逆流」解説

佐藤 忠男

映画評論家
日本映画学校校長



日本では無声映画は弁士の説明つきで上映されたので決してサイレントではなかったが、とくに立回り中心のチャンバラ映画はそうだった。初期の無声映画は邦画は三味線などの邦楽器、洋画はピアノなどの洋楽器で伴奏をつけていたのだが、ある時期から両方を一緒にした和洋合奏という形式が現れるようになった。一般の演奏会では邦楽と洋楽は全く別々の世界で、交流は決してあり得なかったのであるが、映画館の伴奏というのは多分に即興的で、いわば気の向くままに行なわれる傾向があったために、チャンバラ映画のクライマックスの大立回りともなれば、ファンもスクリーンのヒーローに声援を送るし、弁士もいちだんと声を張りあげるだろうし、伴奏の楽士たちも邦楽と洋楽の垣根など取っ払ってここを先途と興奮を盛り上げずにはいられなかったであろう。

一九二四年の「逆流」と、翌一九二五年の「雄呂血」は、阪東妻三郎のいうひとつの時代を画したスーパースターの人気急上昇期の代表作である。日本のチャンバラ映画の流行は一九一〇年頃から始まったのだが、その初期の立回りは歌舞伎出身の俳優たちによる歌舞伎ふうのおっとりとしたものだった。ヒーローの侍が敵をひとり斬るたびに大見得を切るといった調子である。一九二三年にデビューした若い剣戟俳優の阪東妻三郎は、ひとり斬るとその余勢をかってすぐ次の敵に迫ってゆくというスピーディな動きで立回りのありかたを決定的に変えたのである。

アメリカ映画にはすでに、アクション映画のスーパースターのダグラス・フェアバンクスが、「奇傑ゾロ」や「三銃士」（ともに一九二〇年）などの痛快なチャンバラ映画で、サーカスのアクロバットのようにびっくりさせる動きの素早さ激しさを見せていた。その影響で日本の舞台でも沢田正二郎のひきいる新国劇という劇団が歌舞伎とは違う躍動的な立回りをつくり出して評判になった。新人スターだった阪東妻三郎はこれを映画に応用したのである。

指導的な脚本家だった寿々喜多呂九平は、当時の社会思潮だった反逆的な気分を時代劇に盛り込んでいくつもヒット作を生んでいたが、彼は自分の作風にもっともふさわしい俳優としてまだ無名時代から阪東妻三郎に注目していた。激しくスピーディな立回りだというだけでなく、それが反逆的な悲逆美を盛りあげるようになって、日本映画はまだ幼いながらひとつの思想を持つようになり、それがまた観客を興奮させたと言える。「逆流」と「雄呂血」はそういう日本映画史上の記念碑的作品であるのだ。